
幻夢抄録—目覚め—1章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録―目覚め―1章

【Nコード】

N0755A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

氷魚の前に現れた、謎の少年・瑪瑙。彼は、氷魚に『また夜に迎えに行くから』と言って消えた。謎が謎をよぶ、壮大スペクタクル。

白昼夢く瑪瑙く

「お前は人じゃねえ。俺と同じ、魔属だよ。まったく、魄だけここに来て、そんなに急ぐ必要が、どこにあったんだ？とにかく今は、早く体に戻んな。夜、また迎えに行くからよ」

氷魚は、眩暈を催した。

あまりに早い展開に、頭がついていけないのだ。

「いや、まだ分かんないんだけど。ね、戻るって、どうやるの？」

「強く念じればいい、やれやれ…じゃ、後でな」

その時、彼が消えたのか、あたしが消えたのか、分からなかった。

「…お、氷魚！？ちよつとあなたどうしたの？！氷魚っ」

「ん…？」

氷魚は、揺さぶられて、目を開く。

どうやら体に戻れたらしい。あたしは、自宅の玄関先にいた。

「さつき学校から電話があって、あなた無断で早退したっていうじゃない。どうしたの？」

「さつき…？ね、お母さんっ、今何時？」

「今？今は、１２時半ちよつと過ぎだけど？」

「１２時…半！？ウソ、どうなってんの？あたしさつきまで学校で？もうっ、一体なにがどうなってんの！？」

氷魚、苦悩中。

「なあに、変な子ねえ…お昼、まだなんでしょ？作るから、早く中に入りなさい」

「う、うん」

―あれも、夢だったのかな？

小首を傾げて、玄関のドアを閉めた。

氷魚は

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0755a/>

幻夢抄録—目覚め—1章

2010年10月9日23時48分発行